
ゆびきりの呪文

Bloody orange

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆびきりの呪文

【Nコード】

N2237Z

【作者名】

B l o o d y o r a n g e

【あらすじ】

《指切りげんまん》を塔の中で交わしたヴィヴィアンとウィリアム。まさか、幼い子供達は、この指切りげんまんが、この塔に住み着く精霊を起こしてしまう呪文になるとは知りもしなかった。

16才になったら迎えに来る。これが呪文を解くカギとなった。それまでの10年間この塔に閉じ込められる事になったヴィヴィアンは、毎日毎日ウィリアムが現れる日をずっと待っていた。

このお話は、昔々ある所に高い塔に閉じ込められた愛くるしい姫が、約束の日に来なかつた自分の許嫁にこっぴどく仕返しをしようと旅に出るお話である。

塔の外には、シロツメクサが辺り一面を真っ白の絨毯に変えている。それを見ながら2人の幼子は自分達の将来の事を約束していた。

この塔には、言い伝えがあつた。

ここで将来の愛を誓えば、それは必ず成し遂げられると言つ言い伝えだつた。

今日も、この塔に遊びに来た2人の子供達は、お互いの愛を誓い合つた。

その時に塔に住んでいる精霊が聞き耳を立てていた事も知らず、約束をした。

シロツメクサで作つた指輪と花冠を女の子の頭に乘せた男の子は、誓いのキスを女の子の柔らかい小さな唇に落とすとした。

精霊はニッコリ笑つた。

《そう、そのシロツメクサの花冠と指輪で、僕を呼び出せるのさ。後は、あの呪文を唱えるんだ……子供に取つては、たわいもないあの呪文をな……》

大きな二つの目は、金のボタンの様にまん丸い。口は、三日月を池に浮かべた様に、笑みを浮かべている。

さあ……願ひ事を言うんだ、その後で呪文を言えば、この契約は完全に結ばれる。その証拠に、ヴィヴィアンの髪の色が、漆黒から月の光を紡いだような、銀色に変わつて行く。

「良い子にしていれば、ほんとにほんとに おむかえ来てくれる

の？」

「そうだよ。君をお嫁さんにするよ。」

「ウィル・ぜったいだよ！」

「ああ。約束するよヴィヴィアン。君が16才になった日の朝に、この塔まで迎えに来るよ」

「じゃあ、ウィル……ヤクソクだよ。ゆびきりげんまんウソついたらハリせんぼんのーます！ ゆびきった！」

まさか、このたわいの無い指切りが、この塔の精霊を起こしてしまふ呪文だったなんて、幼い2人は知らなかった。

塔の外では、季節外れの雷が鳴り響いた。それがこの塔の精霊との契約完了の印だった。ヴィヴィアンの髪の色が、銀色になった。

「じゃあ、行つて来るよ」

《契約完了》

あの玄関からあの人が出て行ったのは、もう10年も前の話。

《ゆびきりげんまん》をした事で、精霊にここに閉じ込められてしまった。その事を父様や母様に話しをしたら、大声で泣かれてしまった。16才になるまで、この塔から一步も出る事は許されないのだと知った。

ゆびきりげんまんは、精霊との約束だから、

私はこの塔の中にずっと閉じ込められて、11年目。

一体何時になったら、私を迎えにくるのよ！

16の誕生日を迎えたヴィヴィアンは、ベッドのシーツを切り裂き、何本も繋げて一本のロープ状にすると、塔の下まで垂らすとそれを伝つて下へと降りて行った。初めて外へと出たヴィヴィアンは、塔に向かって投げキッスをする、スキップして馬屋まで行くと愛馬のヘルダに股がると、手綱を引くとー？させると、颯爽と栗毛色の愛馬を走らせた。

「やった〜！！ 自由だ〜！！」

もう、誰にも何も言わせない！

16の私の誕生日には迎えに来るって、お嫁さんにしてくれるって言ったくせに……！！

あれから何回も壁に日にちの傷を付け、季節の移り変わりを何度もあの塔の上から見て来た。

とうとう、昨日が私の16回目の誕生日だった。

最高の誕生日になる筈だったのに、待ちこがれていたあの人は、とうとう現れなかった。

ウィリアム……どうして？

どうして来てくれないの？

馬を走らせたヴィヴィアンは、塔から出来るだけ離れた大きな街へと向った。

女の一人旅は、何かと物騒になる。事前に手に入れておいた男物の洋服に身を包むと、長い金色の髪を無造作に一つに纏めた。

これでどこからみても、ちょっと痩せぎすの少年にしか見えないだろうな……。

おまけに胸は無いしな……。

とにかくあのウィリアムを見つけさせてやる！！

見つけたら、ロープでグルグル巻きにして、ヘルダに括り着けて、引き摺ってやる。

カマキリの街

ノアと言う大きな街に着いたヴィヴィアンは、宿屋へと向う途中で酔っぱらい達に絡まれている女性2人を助けた。

彼女達に、自分の名前を聞かれて思わず「ウィリアム」と言っってしまった。

彼女達の名前は、ティスとマンナと言った。

すると彼女達は、顔を見合わせて「ウソ……。あなた、あのウィリアムなの？」凝視している。

オイオイ、あのつてどのウィリアムなんだ？

「一体俺の事で、どんなウワサになっているのか知りたくってね、聞かせてくれないか？」

「良いのかしら？ 気に触ったらごめんなさいね」

女達が話してくれたウィリアムは、どうやらヴィヴィアンが探しているウィリアムとは違うようだった。

女つたらしで、かつこ付けで、腕は滅法弱いくせに、可愛い少女を見るとすぐ口説く。

どんな顔をしているのだ？と聞いてみると、そのウィリアムと言う男の似顔絵を描いてくれた。

しかし、これがまたヘタクソな絵だった。

辛うじて、人間だと分かるがこんな人間なんているのか？

今夜は、その女達の家泊まらせてもらう事になった。

黒髪を両耳にかけたマンナの耳の穴から、虫の触覚が見え隠れしていた。それを見たヴィヴィアンは眉一つ動かさず、彼女達に着いて行った。

「ここが私達の家なのよ」

そう言つて彼女達の家に入ると、其処には沢山の男達が入っていた。

「フフフ。ウィリアム、あなたで丁度100人目だわ」

そう叫ぶと、ヴィヴィアンの目の前でドアを閉めた。

部屋の中には、沢山の男達がいた。一体ここで何が行われるんだ？すると、外から女達の声が聞こえて来た。

「レタキ ヨシユア レタキ ヨシユアジゴルバ！」

呪文が終わるか終わらないかと言う時に、壁と言う壁から、手が出て来た。

それらの手達は、まるで意思でもあるかのように、男達の身体を貫いて行く。あるものは、頭を大きな手に寄つて握り潰され、ある者は心の蔵を刳り貫かれ、目の前で握り潰される。ある者は、生きながら内蔵を引き抜かれた。大きな手が杭の様に鋭くなると、10人の男達の身体を突き刺した。一人一人の身体を突き刺す度に、周りに骨が碎かれる音が響く。その音を聞いた他の男達は、逃げ惑いながら、ドアの方へと寄つて来る。

ドアの方に逃げて来た男達は、四肢を手達に寄つて掴まれ、引き裂かれた。

そんな地獄絵図のような残酷な事が、ヴィヴィアンの目の前で行われていた。

不思議な事に、ヴィヴィアンの周りにはその手達は、近寄る事など無かった。

全てが終わつた頃には、家の中の壁と言う壁、床と言う床には、血みどろの血の海が広がっていた。

ヴィヴィアンの周りに来た手達は、彼女を包む様に血の飛沫から守っていた。

男達の叫び声が止まると、女達がドアを開けると白い手達に守られ

ているヴィヴィアンを見つけた。

「お前は、男じゃないのか?!」

「だったら、どうした」

「いや……ここじゃ男は処刑される街なのさ」

「男が処刑される街?」

「ああ。ろくに仕事もしない酒を飲んでは博打を打つばかりの男達に、女達の怒りはとうとう頂点になったんだ」

最初に処刑されたのは、この街でも権力を誇っていた貴族だった。それを皮切りに、男達の処刑は始まった。

それ以来、この街では夕方5時以降、男達が街を彷徨うと処刑の対象となり、男達の数も減って行った。

だが、女が多いと言う事で、他の街から態々男達がやって来る。女達は、取り憑かれた様に、男達と身体を交えると、子供を宿した後男達を惨殺した。

「女は、常に秩序を守りこの街で生きて来た。男はそれを乱す。ならば、それらを排除するだけだ」

この街の話聞いていたヴィヴィアンは、何とも恐ろしい話だと思っ

た。ヴィヴィアンは、彼女達に自分はウィリアムと言う名の男を捜していると話すと、彼女達は今まで処刑して来た男の中には、そんな名前は無かったと言っていた。

「そうか。ならば、ここには長居しない方が良いな」

女達は、ヴィヴィアンを止める事はしなかった。もし、その男を捜すのなら、ラックと言う街にいるかもしれないと教えてくれた。

白い尾根を超えた向こう側にある街だと言うと、ヴィヴィアンは颯爽と馬に股がるとノアの街を後にした。

街から離れた小高い丘に立ったヴィヴィアンは、「レタキジュリアレタキジュリア」と呪文を唱えると、ノアの街の方から甲高い女達の叫び声が聞こえた。

その後に、空に飛び立って行く沢山の数の虫達。

「ヨナレオノホジュジュリア！」

ヴィヴィアンが空に手を翳すと手の平から炎の渦が空に向かって放たれた。

虫達が、全てヴィヴィアンの魔法に寄って焼き殺されると、黒い雨が降って来た。

地面に眼をやると、それらは全てメスの蠅螂だった。

やはり取り憑かれていたのか・・・。

ヴィヴィアンは、そう呟くと愛馬のヘルダに股がると次の街へと向って行った。

眠らない街ーラック

白く気高い山々を愛馬に股がり颯爽と行くのは、僅か16才の少女自分を迎えに来ると約束した男を捜す旅を続けている。

山を1つ超えると、ヴィヴィアンは少し休憩を取る事にした。

「あの山を越えれば、次の目的地のラックがあるのか・・・一体どんな街なんだろう」

緑の草原の上にゴロリと横になると、ヴィヴィアンは大きく背伸びをした。

『迎えに来るからね』

幼い頃にウィリアムと交わした約束を思い出した。

「嘘つきが。お前は迎えに来なかったじゃないか。私が16の誕生日を迎える朝に、私をあつたから出すために来てくれると言ったのに・・・。ウィリアムの嘘つき！」

嘘つき〜うそつき〜うそつき〜うそつき〜

ヴィヴィアンの声が山に跳ね返って木霊する。

「大声を出したら、少しはすっきりしたかもな。ヘルダ、そろそろ行くか！」

そう言うと、愛馬のヘルダに股がり目指すは次の街、ラックへ。

ヴィヴィアン達が、山を超え始めた頃には、日も西に傾きかけていた。ラックの街の頭上には、街の明かりが反射しているのだろう。赤々と光っていた。

「これは一体どう言う事なのだ？」

町外れの道にまでも、ガス灯に火が灯っている。そして、山の反対側には、これまでヴィヴィアンが見た事も無い、大きな海が広がっている。此処は、海に開かれた街だったのか・・・。だが、何だ？

すれ違う人々の顔を見る度に、精気がない。

目の下に隈を作った人達が、まるで死人のように道を歩いている。

その度に、ガス灯の灯が揺れている。

ヴィヴィアンは、手頃な店の前にヘルダを止めると、店の中へと入って行った。

其処には、沢山のランプが置いてあった。

女主人は、ヴィヴィアンを見るとにっこりと頬んでランプはどう？と聞いて来た。

ヴィヴィアンは、さらりと躲すと近くの換金をして、近くの宿屋を教えてもらおうと今夜は其処で一晩泊まる事にした。

ベッドに横になり、目を瞑ると溜息をついた。

初めはカーテンを閉めなくても、そのうちガス灯の灯も消えるだろうと思っていたが、一向に消える事はなかった。

窓際に立ったヴィヴィアンはカーテンを閉めようとした時に、ある物を見て驚いた。

「ここは．．．．．一体何なんだ？」

煌煌と火が灯るガス灯の下には、何人も人間が折り重なる様に倒れている。消えそうになる度に、また一人街の人がフラリと家から出て来ては、ガス灯の下に倒れた。

「余程、私も疲れたらしいな。あんな幻覚が見える様になるとは．．．」

そう言うつとヴィヴィアンはカーテンを閉めて、ベッドに横になった。早朝に目が覚めたヴィヴィアンは、飛び起きるとすぐさま窓のカーテンを開け放った。

朝日がまだ上つてはおらず、通りのガス灯にもまだ火が灯っている。

ガス灯の周りには、街中の人々が集まっていた。

彼ら顔には、疲労が色濃く出ている。

どうやら、昨夜の出来事は夢ではなかったようだ。

朝日が昇ると同時に、ガス灯の灯火が消えると人々は気が付いたかの様に、それぞれの家へと帰って行った。

ヴィヴィアンは、一体何が何だか分からず、もう少しこの街で様子を見てみる事にした。

階下に行くとは宿屋の女将さんのリリアとダンナさんのジョーが、ニコニコと笑っている。

その側には、昨日この街に来た時に宿屋の場所を訪ねる際に入った店のランプが置いてあった。

夫婦に、そのランプがどうしてこの宿屋にあるのかと聞くと、夫婦はこのランプは幸福のランプと言う事で、ランプの女主人から貰ったと言っていた。

ランプを見せて欲しいとヴィヴィアンが頼むと、夫婦は快く見せてくれた。

ランプの火を灯す所に魔法が掛けられている。それを確認したヴィヴィアンは「ロエキトイズサ」と小さな声で呪文を唱えた。オレンジだった炎の光が、明るい黄色の光に変わった。

どうやら、これでこの夫婦は、大丈夫だ。

リリアに、ランプを売っている店の女主人の事を聞くと、色々と教えてくれた。

彼女の名は、ミセス ヴィンと言う。それを聞いたヴィヴィアンは、眉を少し動かすと外を見た。

どうやら、この街では卵料理や鳥肉料理も無いらしい。だが、その代わりにコーンや野菜に魚を主として食べている。

また、どうやらこの街も取り憑かれているようだ。

しかも、あのランプ屋の女主人、ヴィン婦人に。

彼女が来る前までは、夜はガス灯など無く、とても不便だったと言っていた。

だが、彼女が来てからは、ランプを持って一軒一軒、ランプの必要性を訴えた後で、お試しに使ってみてはどうですか？とランプを渡したと言うのだ。

ヴィヴィアンは、今から家を一軒一軒回って歩くよりも、この街の何処かで街中のランプをコントロールしている大本のランプがある筈だと考えた。

そこで、ヴィヴィアンは、街外れにある小高い丘に一際目立つ大きなガス灯を見つけると、愛馬のヘルダを使って其処まで行ってみた。ガス灯に近づくと魔法で幾重にも、結界が張ってあった。

ヴィヴィアンは、その幾重にも張ってある結界の編み目をくぐり抜けると、内側から凍結の魔法をかけた。

「こういふ結界は、外からは無理でも、中からは案外簡単にかかるのよね」

そう呟くと、ヴィヴィアンは、ガス灯に一步、また一步と近づいた。ガス灯は、姿を変化させると、巨大なモグラに変わって行った。

ヴィヴィアンは、両手を地面に着けると、「レイカハ！ロエキトイズサ！」そう叫んだ。

巨大モグラは、元の姿に戻れた事を確認すると、ヴィヴィアンに感謝した。

どうやら、この巨大モグラは、この街に1つだけ存在する厄払い（エキソシスト）が出来る霊験高い神父だったらしく、ヴィヴィアンに夜の街にはびこむジョロウグモから、街を守って下さいと懇願して来た。

自分の力では、蜘蛛には勝てないと嘆いた神父を見て、ヴィヴィアンは乗りかかった船だからと助ける事にした。

モグラになっている神父をもとの姿に戻すために、呪文を唱えるヴィヴィアン。

「レドモ二トモレドモ」

そう叫ぶと、モグラの身体から、沢山の命の光が放出されると段々

とモグラ自身が萎んで行った。

案外、イケメンな神父を見て、ガラにも無くポツと赤くなったヴィアンは、神父の足下を見て、驚いた。

まるで木の根っこの様に、足から何百本もの細い蜘蛛の糸が出ている。

魔法で出した銀の巨大なハサミで、その糸を断ち切ると、イケメン神父はその反動で後へと飛ばされた。

エクソシストとして働かなくてはならない神父自らが、悪霊の手先みたいになってしまったのだから、可哀想に……。

イケメン神父に少し同情をすると、ヴィアンは、地面が揺れるのを感じて、空中に身体を浮かせた。

すると、割れた地面から巨大な白い女郎蜘蛛シヨロウケモが出て来ると、ヴィアンに向って粘っこい糸を勢い良く吐き出した。それをヒラリと

飛んだり跳ねたりして難なく躲したヴィアンは、自分のネックレスから、光の剣を出すとそれで女郎蜘蛛シヨロウケモの脳天を突き刺した。

耳を劈くような叫び声と共に、蜘蛛の姿は、光の剣の力に寄って散り散りになった。

辺りに霧が立ちこめて来ると、ヴィアンは手応えの無さに眉を顰めた。

「どうやら、本物はまだあの店にいるらしいな」

まだ、日が傾かない昼間のうちに勝負を着ける事にしようと思ったヴィアンは、その辺で伸びていたイケメン神父をヘルダの背中に乗せると、ヒラリとヘルダに股がり、急いでランプ屋へと向った。宿屋の夫婦にイケメン神父を渡すと彼らは、神父を見て驚いていた。どうやら このイケメン神父は相当位の高い神父だったらしく、その神父がやられるほど強い魔物がこの街に蔓延っていた事実を漸く知ったようだ。

2人に、これからランプ屋に行く事を告げ、日が落ちるまで外を歩かない様にと告げた。

ヴィヴィアンが、ランプ屋に到着すると女主人は、ニコニコと微笑んでいた。

その微笑みが、真の微笑みならば良いが、どうやら違うようだ。私の血肉を囓し、新たな強い力を得ようと企む笑みだった。

「あたただったのね、私の可愛いお坊やを死に追いやったのは。あの子は、あなたを甘く見ていたようだけど、私は違うよ」

言葉が言い終わるかと言う時に、メリメリメリと女主人の身体の皮膚が左右に破れると、中から出て来たのは赤黒い蜘蛛だった。その背には、白い髑髏ドクロのマークが浮かんで見える。そして、腹は血の様に真っ赤だ。

「ウイドー・・・」

気味の悪い事に、蜘蛛の顔は、綺麗なヴィンの顔が取って着けた様にちよこんと乗っている。

ヴィヴィアンは、掌をヴィンの方へと向けると炎の渦が、生き物の様に右へ左へとうねりながらヴィンの周りを囲む。それはまるで鳥かごの中にいる蜘蛛のようだった。ヴィヴィアンが掌をぐつと閉じると、ヴィンの周りを囲んでいた炎の鳥かごは、ヴィンを捕えて焼き殺した。

ギイイイイイイ

耳を劈くような、ヴィンの悲鳴が店内に響き渡った。

ヴィヴィアンは、一旦店の外へ出ると、店全体を巨大な光の籠で包むと、「消却!」そう呟いた。

一瞬にして、店は跡形も無くなった。

ヴィヴィアンは、宿屋に戻るとこの街を操っていたジヨロウグモを退治した事を告げると、この先にある街の事を聞き出した。

するとイケメン神父が、此処から海を隔てた向こう側にある、ピシヤの国に行ってみてはどうかと提案して来た。

何でも、そこには眼も覚めるような美大夫が、魔法で眠らされていると言う話だった。

その美大夫の名前がウィルと言う。

もしかしたら、私が探しているウィリアムかもしれない・・・。
なら、行ってみるしかないか。

と言う事で、この港町から船でピシヤの国へと行く事になった。

眠りの王子

船に揺られる事、数時間。漸く船はピシヤの国へと着いた。

少しばかりの食料と愛馬のヘルダを連れて、ピシヤの領土へ足を一歩踏み入れたヴィヴィアンは、まず情報探しを試みる事にした。

飲み屋とか、レストラン、宿屋を当たってみたが、誰も起きている者は居なかった。

まるで、この国全体が巨大な魔法円の中にすっぽりと入れられたみたいだ。

レストランでは、美味しそうにスープを飲んでいるお客、水を自分の長いヒゲを自慢している偉そうな客の頭の上に、零しそうになっているウェイターなど、本当に今にも動き出しそうだ。

飲み屋では、ケンカの最中だったんだろう。瓶が頭に振り下ろされる一歩手前で、止まっている。

ヴィヴィアンは、その光景を見て瓶をスリッパに持ち替えさせた。

「これなら、痛くはないだろう」

そう呟くと、フツツと笑った。

塔に居た頃に、毎晩毎晩読んだ昔話は、もう暗唱出来る程だ。この国の状態がある昔話の一場面に酷似していた。

そこで、ヴィヴィアンは王子が眠っているであろう丘の上の白亜の城へと愛馬ヘルダを走らせた。

城へ向う途中、いきなり地面が割れると巨大なイバラが出て来た。それをネックレスから出した光の剣で、バツサバツサと切り落とすと、ヴィヴィアン達は前へ前へと少しずつ前進して行った。

イバラを抜けると、今度は大きな真つ黒い龍がヴィヴィアン達の前立ちふさがった。

ここまで来ると、ヴィヴィアン自身溜息しか出て来ない。

「ここまで忠実にしなくても良いのに。面倒臭いな・・・」

そう言うと掌を龍に向けた。

掌から炎の剣が出て来ると、龍の心臓に向って一直線に飛んで行った。

竜は、もがき苦しむと大きな身体を揺らして地面に突っ伏した。龍の姿が消えてしまった後、ヴィヴィアンは城の一番上にある部屋へと向って行った。

すると其処に眠っていたのは、自分を迎えに来ると約束をしていたウィリアムだった、

「なるほど、これなら迎えに来れる筈はないな・・・」

納得した様に呟いたヴィヴィアンは、ウィリアムの赤いぽってりとした唇に優しくキスをした。

すると、すぐにウィリアムの瞳が開かれると、深い緑の瞳でヴィヴィアンを見て驚いていた。

「ヴィヴィー！ どうしてここに？」

「え？ 折角助けてやったのに、あんたが悪い魔法使いの策略に嵌って眠らされていたから、助けに来てやったんでしょ！ 全くもう！ 私の16才の誕生日には、必ず迎えに来ると言っていたくせに．．．」

ブツブツとヴィヴィアンが文句を足れていると、ウィリアムがニッコリ微笑むとヴィヴィアンを抱き締めた。

「ごめん。本当は、僕がかっこ良く君を助けに行く筈だったのに、悔しいな．．．」

ウィリアムの目覚めで国中が目覚めました。

王やお妃は、ウィリアムが手を引いて連れて来たヴィヴィアンを見て、驚いた。

《いつか、妖精達が言っていた世界を正しき方へと導く力を持つ姫が現れるだろう》

その者は、黄金をその髪に纏ったような眩いばかりの金の髪、白い肌に映える澄み切った湖の色のような淡いブルーの瞳、バラも恥じらうようなポツテリとした赤い唇。数々の魔術を使いこなせるその少女こそが、この国の――いや、この世界の救世主なのだ。

その事を聞いたヴィヴィアンは、頭をポリポリと搔くと「普通は、王子がお姫様を助けに行くんだけどな．．．」そう呟いた。

「ま、でも、こんなハッピーエンドも良いかもね」

そう言い足すと、ウィリアムを抱き締め、お互いに貪り合う様にキ

スをした。

2人は未永く幸せに暮らしましたとき。

パタンと本を閉じたヴィヴィアンは、自分の膝の上に乗ってお話を聞いていた5才になる姫に微笑んだ。

姫はうつらうつらと船をこいでいる。それを見て自分は幸せを噛み締める事が出来たと眼を細めるヴィヴィアンは、姫の背中を軽く撫でながら、いつものように言う。

「そろそろ、寝る時間よりズ」

眠たい目を擦りながら、姫はヴィヴィアンに聞いて来た。

今夜こそ、知りたいのだろう。私が毎晩話をしている事が、ウソか誠かを。

「ん．．．．はあゝい。かあしやま。ねえかあしやま。さっき話してくれたお話は、本当の事なの？」

余りの眠たさに姫の舌足らずに輪をかけたようだ。その事を笑うと、すぐ姫はホッペタを膨らませて拗ねるから、私は言わない。

「そうよ。リズが知りたいなら、ノアにある母様の銅像があるから、今度それを観に行きましょう。それに、ラックにはまだイケメン神父がいるから、久々に会いに行こうかしらね」

イケメン神父は、その後 彼も悪魔払い（エクソシスト）としての技術を磨き、今ではその技を自分の息子に教えている。

以前、彼に会った時は魔物の気持ちなど分からなくて当然だと言う風に言っていたが、いざ自分が魔物に変えられて、ようやく悪魔払い（エクソシスト）させられる恐ろしく哀しい気持ちが分かったと

言っていた。

そんな真面目なイケメン神父だから、リズも会ってみたいのだろう。あのイケメン神父にも、リズと同じ歳の息子がいる。彼も父親と同じ様に将来は、イケメンになる……。

その事を知ってか知らずか、リズは「アルと遊べる」と言っではしゃいでいた。

私の愛馬のヘルダは、ウィリアムの愛馬ザックとの間に、子馬を生んだ。

白い馬の名前がアル。

「わーい！ やったー！」

彼女の愛馬アルに乗って遊べると分かった途端、眠気が吹っ飛んでしまったようだ。

「だから、今日は早く寝なさい。でないと……アルに乗せられないわ」

私の言葉に、肩を軽く竦めたリズは、馬のヌイグルミを抱き締めるとゆっくりその大きな目を閉じた。

「はい。かあさま。おやすみなさい」

「お休み」

夫婦の寝室へと戻ってきたヴィヴィアンをウィリアムが、待ちくたびれたとばかりに後から頂に唇を当てながら抱き締める。

「待ちくたびれたよ。僕の愛しの奥様」

そう言うと、ウィリアムはヴィヴィアンを抱えベッドへと連れて行った。

ヴィヴィアンが、救った二つの大きな街は、今ではヴィヴィアンとウィリアムが統治している。

二人の甘い幸せに、どんな魔物の魔法でも敵う者はない。

愛は、どんな強力な魔法よりも、無限の力を出させる究極の魔法。

二人の子供であるリズが、自分の運命の男性を旅をしに出るのは、また別のお話。

(後書き)

ランプのゆらゆらと揺れる小さな炎に、もし人の命が宿っていたら
・
・怖いかもと思って、この話を書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2237z/>

ゆびきりの呪文

2011年12月8日00時59分発行